

世界トップレベルサッカーにおける攻撃戦術の特徴

The features of the world's top level soccer team's tactics

1K10C248 竹中 達郎

主査 堀野 博幸 先生

副査 松井 泰二 先生

【目的】

現代サッカーは常に進化し続けており、選手に求められる技能は日々変化し続けている。特に守備戦術の飛躍的な進歩により、ゴールを奪うことはより困難になっている。そのため、最先端のゲームを分析し、最新の戦術の特徴を明らかにした上で、必要な要素を現場にフィードバックすることは将来世界で戦える選手を育成する上で欠かせない。

しかし、従来の分析手法では、数値を表面的に意味解釈した分析にとどまっている場合や、筆者の主観をもとに分析を行い、客観性にかける場合が少なくない。

そこで、本研究ではゲームを局面別に分類し、それぞれの局面でどのようなプレーが行われたかを数量的に分析する手法を用い、客観性を保ちつつ局面に応じて多角的にゲームを分析した。それにより、現代トップレベルサッカーにおける攻撃戦術の特徴を明らかにした上で、必要とされる技術戦術を明らかにし、今後の日本サッカーの発展の一助となることを本研究の目的とした。

【方法】

1. 分析対象

UEFA EURO 2012 における有効攻撃 1120 シーンを対象とした。

2. 分析項目

有効攻撃シーンにおける攻撃開始位置、パス本数、攻撃所要時間を集計した。さらに、相手守備組織の最前面より自陣側でのプレーを「つくり」、相手守備組織内でのプレーを「しかけ」、相手守備組織背後でのプレーを「くずし」、シュートを「つめ」とし、それぞれの局面でのパス本数、攻撃所要時間を集計した。

3. 分析方法

各分析項目で集計した数値を χ^2 検定を用いて有意差の有無を調べ、有意差が見られた項目に関しては残差分析を行い、各項目の差異を調べた。

【結果】

1. ボール奪取位置

ミドルサード・ディフェンディングサード・アタッキングサードの順に有意に多い結果が得られた。

また、中央で開始された攻撃の方がサイドで開始された攻撃より有意に多かった。

2. パス本数

つくり局面においては 0-2 本のパスを用いた攻撃が有意に少なく、9-11 本のパスを用いた攻撃が有意に多かった。しかけ局面では、0-2 本のパスが有意に少なく、3-5,6-8,12 本以上のパスを用いた攻撃が有意に多かった。くずし局面では、0-2 本のパスを用いた攻撃が有意に多く、3 本以上のパスを用いた攻撃が有意に少なかった。

3. 攻撃所要時間

つくり局面においては 6-10 秒、11-15 秒を要した攻撃が有意に多く、21-25 秒、36-40 秒を要した攻撃が有意に少なかった。しかけ局面においては 1-5 秒を要した攻撃のみが有意に少なく、その他の 6 秒以上を要した攻撃は有意に多かった。

【考察】

速攻・遅攻の観点では、攻撃開始位置は低い傾向にあるものの、攻撃所要時間では 9 秒以下の攻撃が最も多く、パス本数でもパス 3 本で攻撃を終了した攻撃が最も多かった。現代サッカーにおいても、速攻は有効な戦術であり、低い位置でボールを奪ってもスピーディーにゴールへ早くボールを運ぶことの必要性が明らかとなった。

有効攻撃を局面別にみると、どの局面でもパスの本数・所要時間が増加するにつれ、有効攻撃数は減少する傾向にあった。しかし、しかけ局面では、パス本数、所要時間が長くなっても有効攻撃数が減少しにくい結果が得られた。つくりの局面では時間をかけずに次の局面へと速やかに移行し、相手守備組織内であるしかけ局面から突破の機会を伺うことが重要であると考えられる。

【結論】

現代サッカーにおいては、フィールド上のどこでボールを奪ったとしても、スピーディーにゴールへボールを運ぶことが重要であることが明らかになった。ボールをゴールへ運ぶ過程においては、しかけ局面の重要性が明らかとなった。相手守備組織内であるしかけ局面においても、ボールを失わずに前へ運ぶ正確な技術、判断が必要である。